

鈴木胤『論語参解』私注(十一)

二十一

子曰甯武子

衛ノ大夫、名ハ兪

邦有道則知、邦無道則愚、

中庸ニ、邦有道其言足以興、邦無道其默足以容トハ、孔子ヲイ

ヘリ、サレハ智トハ、口ヲキ、智慧ヲアラハスナリ、愚トハ、

愚ナルガ如ク黙シテ身ヲ全ウスルヲ云也、甯兪孔子共ニ道ナキ

世ノ人ナレバ、上ノ句ハ共ニ帶説ナリ、仮設ノ詞ナリ

其知可及也、其愚不可及也

其ハ甯武子ヲサス也、サレバ是ハタゞ、甯武子ガ上ノ論ナリ、

ナベテノ智ヲヤスク、愚ヲ難シトスルニハアラズ

田尻祐一郎

(1)「国有道、其言足以興、国無道、其默足以容、詩曰、既明且哲、以保其身、其此之謂与」(『中庸』、『中庸章句』の分章では第二十七章)

(2)「愚」について朱子は、困難な事態に立ち向かう愚直さと解釈した。「按春秋伝、武子仕衛、当文公成公之時、……成公無道、至於失国、而武子周旋此間、尽心竭力、不避艱險、凡其所処、皆智巧之士、所深避而不肯為者、而能卒保其身、以濟其君、此其愚之不可及也」(『論語集註』)。さらに朱子は圈外に程伊川を引いて、「愚」を「沈晦」とする解釈を紹介しているが、これについて崎門の朱子学者は、これは身を隠して時を待つというような意味で

はなく、主君や自身をして巧みに危難を免れさせるために策を尽すことであつて、本注と同じ趣旨であると念を押している(綱齋『論語師説』、強齋『論語講義』)。仁齋や徂徠は、困難を前にしての愚直さというよりも、才智を表立てることなく事を成就したことを孔子が称えたものだとした。胤は、古注に倣つた春台を受けている。春台は、古注(孔安国)の「佯愚似実」に依つて、「愚者、言周旋如愚也」(『論語古訓』)として、また「凡士君子当平世、用其智慮以奉其職、則順而易、当乱世、用其智慮戡乱靖難、則逆而難、不虧名節、不履禍機、韜晦沈黙、優游卒歲、使人見以為愚、是其尤難者也、甯武子為之、故孔子以為不可及也」(『論語古訓外伝』)とそれを敷衍している。

二十二

子在陳曰、帰与帰与、

用ヒラレズ、道行レザル故ニ、魯ニ帰テ、教ヘ置タル弟子ドモ

ヲ、猶又宜ク取立ンカトナリ

吾党

サト也

之小子

若キ者也

狂

簡

道ノ方ニ心ノス、ミ過テ、物狂ハシキヤウナルタチナリ

サル者ハ必クダクシキ世事ニ拘ハラズシテ、大ザヤカニ過ルモノ也○二字ツヰキテ、世俗ニハ偏氣者トイハレ、君子ニハ取ヘアリ、一カ、リアリト思ハル、人ナリ

斐然

文理ノアザヤカニワカレ見事ナル貌ナリ

成章

章ハ、文章トツヰキテ、筋道ノ分レ、アヤモヤウノアルモノヲ云、成章ハ、織成タル錦ノ如ク、学問見識各程ニ筋ガ立テ、一器量ツ、アルライフナリ

不知所以裁之

裁ノ字ハ、前ノ乗桴ノ章ニ説リ、狂簡ノ小子、章ヲ成セル錦ヲモ、裁テ衣服ニスル所以ヲ不知故ニ、帰テ過不及ヲ斟酌シテ、弥物ノ用ニ立ベク教ヘ成サントナリ

(1) 「おおざやけ」は、「細かなことにこだわらないで、派手に明朗にふるまうこと」(『日本国語大辞典』)

(2) 本篇第七章

(3) 朱子は、道を行おうとする初志の挫折を思い知らされた孔子の「歎」きの言葉として読み、中庸を得た人材が望めないために、次のランクである「狂簡」に希望を託したのだとした。

「此孔子周流四方、道不行而思帰之歎也、……夫子初心欲行其道於天下、至是而知其終不用也、於是始欲成就後學、以伝道於來世、又不得中行之士、而思其次」(『論語集註』)。これに反対するのが徂徠であり、これは孔子が自らを「悔」いた言葉だとした。徂徠によれば、先王の道は「大」なるもので、「狂簡」というほどの人物でなければ荷いするものではない。自分はそれらの人物を棄てて遊歴の旅を続け、彼らを導く方法を考えてこなかった孔子は自責の思いにかられ、魯国に帰って彼らを導くべき書を編纂することを決意した。それが、六経だといふのである。「蓋孔子道不行於当世、乃欲伝之後、先王之道大、非狂簡不能負荷、所以思也」(『論語微』)。徂徠にとっての「狂簡」は、「中行之士」を得ないという状況の下での、やむを得ず選ばれる次善の者ではありえない。春台は、徂徠の発言として「茂卿曰、此孔子知命之発也」と伝えている(『論語古訓』)。こうして徂徠・春台においては、「帰与、帰与」に込められた孔子の思ひは、六経編纂の意図にも直接に繋がる極めて重大なもの、あるいは孔子の「知命」の問題として論じられていくが、腋の解釈は、「狂簡」の理解も含めて、それらの重大な主題に関わることなく淡々としている。仁斎について、一言だけ触れておこう。政治家としての三代の聖人たちよりも、門人を教育して「道」を後世に伝えた孔子の方が偉大だといふのはかねての持論であるが、この章について仁斎は、政治での活躍の場を失ったという孔子の不幸は、それによつ

て「道」が後世に伝わったという意味で、人類にとっての幸福だったと力を込めて論じている。「蓋三代聖人雖其德盛、然与人共治、因時為政、不得大被于万世之遠、至於吾夫子而後、教法初立、道学初明、猶日月麗天、万古不墜、猗嗟盛哉、此雖夫子之不幸、然在万世学者、則実大至幸也」(『論語古義』)

二十三

子曰、伯夷叔齊

此二人ノ事、此書ニ云、古ノ賢人也(1) 莊子ニ云、昔周ノ興ル時ニ、士二人アリ、孤竹ニヨリ、孟子ニ云、殷ノ紂王ガ時、北海ノ浜ニ避居テ、天下ノ清ヲ待テリ、(2) 北海ノ浜ト孤竹ト同地ナル事、国語ノ齊語ヲ見テ知ベシ、(3) 孟子ニ又云、伯夷大公ノ二老ハ、天下ノ大老也、文王興ルト聞テ作テイハク、吾西伯ハ善ク老ヲ養フ君トキ、ヌト云テ、往テコレニ帰ストアルニ、(4) 此書ニハ首陽山ノ下ニ餓スト見エ、(5) 莊子ニハ名ニ首陽ニ死ストイヘリ、(6) 思フニ西伯ニ帰セントテ行道ニテ、首陽ノ下ニ餓テ死セシナルベシ、史記ニ此人ノ伝トアルハ、(7) 事實誤アリ、信用シカタキ事、先儒弁アリ、(8) 予モ亦別ニ論アリ、(9)

不念旧惡、

殷ノ紂王無道ニシテ、諸侯ノ風儀モ其ニ從テ皆悪カリシ故ニ、(10) 伯夷ハ不降其志、不辱其身シテ、何方ニモ仕ヘズ、天下ノ大老ト

云程ノ器量人望故ニ、諸侯ヨリ辞令ヲ善シテ至リテ、拘ヘント云者アレドモウケズトイヘリ、サバカリ悪ヲニクミシ人ナレドモ、フルキ悪ヲバ念ハザリシトナリ、念トハ、忘レズシテ心ニカクル也、不念ハ、忘レタルガ如ク、心ニカケザルナリ、徂来先生云、旧キ惡トハ、時去リ世移リテ、改シニモ改ガタキ惡事ヲ云、タトヘバ楚諸國ヲ滅シ、田氏齊ヲ篡フガ如キ、昭王宣王ノ時ニナリテハ旧惡也、サレバ孔子モ聘ニ応ジ孟軻モ遊事セラレタリ、大王宣父始メテ強大ナリシハ、人ノ國ヲ奪ヒ、人ノ地ヲ侵シタル事モ必アリケンヲ、伯夷其孫ノ文王ノ仁徳ヲキ、テ往テ帰セシハ、旧惡ヲオモハザルノ一事ナリ、トイハレタリ⁽¹⁾怨是以希⁽²⁾

同ジ先生云、希ハ微ナリ、カスカニテ見エ聞エザルヲ云、伯夷叔齊ノ世ヲソムキテ仕ヘズシテ果ヌルハ、怨ミ憤リアルニ似タリ、サレドモ仁者ニテ、悪ヲニクム事甚シカラズ、旧惡ヲ念ハザル寛厚ノ心ナレバ、怨憤ノサマモ見エ聞エザルハ、誠ニ怨タル事ナキ故ナリトナリ⁽¹²⁾

(1) 「子貢……入曰、伯夷叔齊何人也、曰、古之賢人也」(述而篇第十四章)

(2) 「昔周之興、有士二人処於孤竹、曰伯夷叔齊」(『莊子』雜篇讓王)

(3) 「孟子曰、伯夷目不視惡色、耳不聽惡声、……当紂之時、居北

海之濱、以待天下之清也」(『孟子』萬章下篇)

(4) 「(恒公)遂北伐山戎、制令支、斬孤竹而南帰、海濱諸侯莫敢不來服」(『國語』齊語)

(5) 「孟子曰、伯夷辟紂居北海之濱、聞文王作興、曰、盍帰乎来、吾聞西伯善養老者、太公辟紂居東海之濱、聞文王作興、曰、盍帰乎来、吾聞西伯善養老者、二老者天下之大老也而帰之、是天下之父帰之也」(『孟子』離婁上篇)

(6) 「伯夷叔齊餓于首陽之下、民至于今称之」(季氏篇第十一章)

(7) 「二子北至首陽之山、遂餓而死焉」(『莊子』雜篇讓王)

(8) よく知られたように、武王が紂を討とうとした時、その馬を叩えて、「父死不葬、爰及干戈、可謂孝乎、以臣弑君、可謂仁乎」と諫めた話や、周の粟を食むを潔しとせず、「以暴易暴兮、不知其非矣」と歌いながら餓死したとする言い伝えを言う(『史記』伯夷列伝)。

(9) 「叩馬諫武王事、明王氏弁其妄尽矣」として徂徠『論語微』が名を挙げた王直「夷齊十論」(『皇明文衡』卷十四)を指すか。

(10) 「伯夷論」(『離屋集』初篇、または『離屋先生文抄』三)に、『史記』の「武王伐紂、而二子諫之、遂以餓死」という所伝について、「凡此皆非事实也」とある。

(11) 「旧惡」について徂徠は、既に改められた個人的な不善と解釈する朱子に反対して、王朝や政權が確立する遠い過去の過程での政治的な不徳・惡業のことだと論じた。「旧惡、旧時之惡也、

……蓋旧時之惡、乃有時去事移欲改而不可得者、是旧惡也、且如楚滅同姓、田氏篡齊、至於昭王宣王之時、既為旧惡、孔子必聘孟軻游事、是不念旧惡也、……宣父剪商、豈無奪人國侵人地之事、……而夷齊聞西伯作興、往而歸之、亦不念旧惡之一事耳」

〔論語微〕

(12) 「希、微也、謂怨之迹不可見也、……然餓於首陽、隱於海濱、其迹似怨、及於西歸於周、享大老之養、而後怨之迹洗然矣」と論じて、「二子胸次脱灑、毫無蒂芥」と評した徂徠『論語微』を、臆なりに要約している。伯夷・叔齊が怨まれること希まれなのではなく、二人が怨みを残すことが希まれだったのだとする徂徠の解釈を支持して、春台がこう述べている。「此章怨字、先儒皆以為人怨夷齊、故其說不通、荻先生獨以為夷齊之怨、其義甚明」(『論語古訓外伝』)。徂徠も従う『孟子』の伝える伯夷・叔齊像が、というより『孟子』の人物評がそもそも恣意的であることを批判して徂徠を斥けようとするのが、明霞である。「夫孟子之論古人、從心而言、信口而語、以資於其弁、故其稱孔門之事、猶或不可從、况談殷周之際者乎、……史記雖疎、亦未悖於孔子之言、且有終始、獨孟子相差遠甚而取以合之、不幾於誣孔子乎」(『論語考』)。こうした議論にもかかわらず、臆は、徂徠や春台・南冥ら徂徠派の解釈に依っている。

二十四

子曰、孰謂微生高直、
微生ハ姓、高ハ名也、下論ニ微生畝アリ、共ニ孔子ノ郷人ナラシカトイヘリ、サレバ瑣細ノ事ヲモ知テ評ゼラレタリ、又戦国策ナドニ、信如尾生トアルモ同人ナリ○此人直者ノ名アルハ、マチガヒナリトナリ、直トハ、辞ヲ曲テ人ニ従フ事ノナキヲ云或乞醢焉

然トコロ我家ニモ醢ハナカリシカドモ、ナシトイヒテ否ビタラバ、スゲナクヤオモハレントテ
乞諸其鄰而与之

其モオシナヘテ常ニ然アラバ、難ズル事モナケレドモ、常ニサハアラズシテ、直者ノ名ヲ取程ノ者ガ、タマ〜畏レゲノアル方ニノミサヤウナルハイカ〜也、トナルベシ、然ラバ微生ト云人ノアル様、郷ニ居テ畏レゲナキ者ニハ、押ヘカ、エナク氣隨ヲハタラキテ、モシ畏レゲアル方ニ向テハ、事ヲ曲タル諛心ナキ事ヲ得ズ、コレ真ノ直者ニハアラザリシナリ○徂来先生旧説ヲヤブリテ、此章ヲ説カレシ趣モ、一ワタリイハレタル事ナガラ、下章ト並ビタルヲ見レバ、猶サル事ニハアラザリケリ、猶下章ノ解ト合セ考ヘシ

(1) 「微生畝謂孔子曰、丘何為是栖栖者与、無乃為佞乎、……」

(憲問篇第三十四章)

(2) 微生高を魯人とするのは古注・新注ともに同じであるが、「郷人」の語は、徂徠の「微生高蓋孔子郷人」(『論語微』)に依る。

(3) 徂徠は後に紹介するように、酢を借りに行ったのが孔子の家人だったから、孔子がこの話を知っていたのだとする。郷党の話題として聞いていたのだとするのは、明霞である。「凡在郷里、

則雖君子亦不得不聞瑣事、……可謂孔子所無乎」(『論語考』)

(4) 春台が「微生、……戦国策作尾生高」(『論語古訓外伝』)として、「尾生之信」(橋の下での逢引きを約束して、川の増水にもかかわらず約束の場所を離れずに溺死した男の話)で知られる人物だとしたことを受けている。

(5) この章をめぐるのは、江戸期の小さな精神史を描くことができるかもしれない。朱子の解釈では、孔子が微生高の不誠実を諷つたのだとする。「夫子……謗其曲意徇物、掠美市恩、不得為直也」(『論語集註』)。些細な事であっても、不誠実という事実は重いと朱子は論じている。これに沿って崎門の朱子学者は、これは「心徳ノ吟味ノ大キナコト」(綱齋『論語師説』)であり、「心術隱微ノ間」が露呈したもので、その「人情ヲツクリ、人ニ恩ヲ売ルイヤラシサ」は争えず、要するに此事においてこそ微生高の「バケガ顯ハ」れたのだとした(強齋『論語講義』)。仁齋は、基本的に朱子の枠組みを継ぎながら、微生高が、周囲から道德家として褒められたいという気持ちで動いたことを問題にしている。「聖人最嫉世之釣名掠美傲然以自高者、若微生高之得直名是也、……

夫子譏高之不直、亦惡郷原之乱徳之意也」(『論語古義』)。そういう「郷原」の心根には、他人を見くびった傲慢さがあることも、仁齋は見逃がしていない。さて徂徠は、胤が「旧説ヲヤブリ」と評した通り、斬新な解釈を与えた。それによれば、孔子の家人が酢を借りに行った時の話を種に、普段から可愛がっていた微生高を孔子が親しみを込めてからかった「戯言」だというのである。

「微生高……以直見称於郷、孔子亦愛之、孰謂微生高直、似謂非直者、蓋反言以戲之耳、親之至也」。徂徠は、朱子の描く孔子像には、ゆつたりしたところがないとする。ここは、郷党での親密な交わりの中の、孔子の穏やかな微笑ましい暮らしぶりを伝えるものなのである。「蓋以見孔子処郷党、愷悌親人也」。そして徂徠は、親しいユーモアにも孔子の巧まざる教えが包まれているのであって、そういう孔子の言葉が読めないのは、朱子をはじめとする儒者が、「詩」を知らないからだとした。「孔子戲言以喻之、使其知凡事不可徒直、亦教誨之道存焉、後儒不学詩、不知言、……陋哉」(『論語微』)。春台・南冥ら徂徠派はこれに従い、古注を重んじる白駒『論語微批』も、部分的に修正を加えて「徴説甚善」とするが、それ以外には、徂徠の解釈を積極的に採ろうとする見解は少ない。余りにも独創的な徂徠の解釈が、戸惑いを与えたのだろうか。興味深いのは、むしろ国学者の発言が盛んなことで、宣長は、「聖人の教の刻酷なることかくの如く、これらはたゞいさ、かの事にて、さしもの不直といふべきほどのことにあ

らず、……すべてよき人にもあやまちわるき事はあるものなり、……たゞ一事の善悪によりて、その人のよしあしを定むるは聖人の道のくせにて、ひがごとなり」(『玉勝間』)と述べている。ここには徂徠と共通する感覚、つまり朱子学者がそうであるような複雑で厄介な人間存在への鈍感さ、善悪を白黒のように単純化することへの軽蔑がある。菊池正古は、孔子の真意は「信」と「直」の違いを説くことであつて、約束を守るのが「信」、虚偽を言わないのが「直」だとしている。微生高は、某人に酔を貸す約束をしていて、それを守つたという意味では「信」ではあつても、それを「直」とは言えないというのである(『論語考』)。胤は、次の「巧言令色」の章と繋げて、「畏レゲアル者」(権勢家)に詔つたものと推論する。次の章と一連のものとする解釈は朱子の周囲にもあつたが(『朱子語類』卷二十九、賀孫録)、綱齋『論語師説』や仁齋『論語古義』も同調している。

二十五

子曰、巧言令色

学而ノ篇ニ已ニ見エテ、ソコニ解セリ⁽¹⁾

足恭、

容貌ノ恭シキニ過ルナリ⁽²⁾

左丘明

人ノ姓名ナリ、左丘トツ、キテ姓カ、孔子ヨリ古キ歟、同時ノ人カ、詳ナラズ○此人ヲ古来、春秋伝ノ作者トセリ、サレドカノ作者ハ、孔子ヨリヨホドオクレタル人ト見ユレバ、宋儒ノコレヲ用ヒザリシハ、ゲニイハレタリ⁽⁴⁾

恥之³⁾

取繕ヒ過テ、詐リ詔ヒノシワザナレバ、義ヲ励ミ仁ヲ志ス人ハ、

恥テ為ザルナリ

丘亦恥之、匿怨⁴⁾

ウラメシキ意趣ナリ

而友^{トスル}

親シク子ンゴロニ交ル也

其人^ヲ

コレハ必畏ロシキ人カ、又ハ求メ頼ム事アル人ナルベシ、求ル事アルガ為、畏ロシキガ為ニカクスルハ、是モ詔ヒナリ、ツタナキヒキヨウ也⁽⁵⁾

左丘明恥之、丘亦恥之³⁾

(1) 学而篇第三章

(2) 徂徠や春台の採つた古注(孔安国)の「便辟」ではなく、「足過也」とする朱子『論語集註』に拠っている。

(3) 古注(孔安国)が「左丘明、魯太史」とし、皇侃もこれを引きいて「左丘明、受春秋於仲尼者也」とした(『論語義疏』)。徂

徠・春台・南冥・明霞らも、『左氏伝』の著者だとしている。

(4) 朱子『論語集註』は、程伊川の「左丘明、古之聞人也」という言葉を引くにとどめ、『左氏伝』との関係を言わない。

(5) 権勢を持つ人物、頼みたいことのある相手、それらに本心の「怨」を隠しながら諂うことを「ヒキヨウ」だとして左丘明も孔子も嫌ったと服は解釈した。服は、前の章と連続して、権勢家への「諂」という点で共通するものとして『論語』の編纂時に併置されたのだと考えている。

『左氏伝』を左丘明の著作とする徠は、「左伝之文、乃史之妙者、宋儒昧於文、其以為浮誇、宜矣」として、さらに「夫詩易列六經、而詩嫌誨淫、易類詭譎、仮使不列六經、則程子謂之何、世微左伝、孰知春秋之意、丘明之功、偉哉、大氏道学先生、妬心頗多」(『論語微』)と述べて『左氏伝』を称え、これに低い評価しか与えないような朱子学の「文」に対する鈍感と狭量を批判した。これに猛然と反撥するのが竹山である。「浮誇」という『左氏伝』評は韓愈のものであつて朱子の言葉ではないとした上で、「蓋伝中所載、神怪妖祥、夢卜讖兆之説、非誣艶浮誕而何」と『左氏伝』の軽薄な神秘志向を指摘して、徠の言う「妬心」に對しては次のように反論した。「徠上妬程朱、下妬闇齋、又妬仁齋、又旁妬歐蘇、一生學術、勃窣成妬窟、海内識者、所同嗟也」(『非微』)。徠の学問こそ「妬心」そのものであつて、皆が辟易しているというのである。

二十六

顔淵

此人ノ年、子路ヨリモタケタリト見エタリ、サレバ史記家語ナドニアル弟子ノ年ハ信シガタシ^①

季路侍^②

此字ノ和訓ノコ、ロ、ハンベリハ、ハヒアリ也、目上ノ人ノ前ニテ、両手ヲツキ居ルハ、是ハワガ御国ノ礼也、モロコシニテハ侍坐モアリ、侍立モアリ、侍ハ、^{ツカフヤカラ}仕事等ト同音同意ナリ

子曰、盍

何莫^③二字ノ合タルニテ、ス、ムルコ、ロ也

各

メイ^④く也

言爾志^⑤

思イレ也

子路曰、

心ツヨクハヤリカナル人故ニ、サシコミテ先答ヘタルナリ

願車馬衣^⑥

衣服装束ナリ^⑦

輕裘

カハキヌハ輕キラヨシトス

与朋友共^⑧

我人ノヘダテナク共ニ用ル也

敵ルトモ

器物衣服共ニソコ子ワロクスルライフ

之ラ而レ無憾ン

遺恨残念ニ思ハヌナリ

顔淵ノ曰ハ、願ハ無ハ伐ツ善ト

善ハ、德行ニテモ、材能ニテモ、世ニスグレタルヲ云、伐ハ、

俗ニブチコハスト云ガ如ク、ソ子ミソシリ、サマタゲソコナフ

ヲ云、是仁齋先生ノ説ニテ、サル事トキコエタリ、旧説ニホコ

ルト解トキタレドモ、伐トキヲホコルト訓ズルハ、先大方ハ武功ニホコ

ルライヘリ、善ニ伐ストハ、イフベクモアラス

無レ施ラ勞ラ

勞ハ功勞ナリ、施ハ弛ト通ジテ、下論ノ不レ施ハ其レ親ヲノ施ニ同シ、

勤功アルモノヲナホザリニシテステオキ勞トキヲハス、酬トキヒモセザ

ルヤウノ事ナカラントナリ○志トキライヘトソノカサレタル寸、

我所能トキヲバイハズシテ、人ノ材能トキヲサマタゲズ、人ノ勤勞トキヲ用

ル事ヲ思ヒヨレル事、誠ニ殊勝ナル心バエナリ是タ卑下謙退

ヲ貴ムニアラズ、己ヲ用ルヲ小シトシ、人ヲ用ルヲ大也トスル

仁人君子ノ道ナリ、前篇ノ君子不器トキ、又孟子ノ樂正子好善トキノ

章トキナンド、アハセ考フベシ

子路ノ曰ハ、願ハ聞ハ子ノ志ヲ、子曰ハ、老者安ハ之ヲ、

老者ハ我ニ安ズルヤウニセント也、安ズトハ、我ヲ心ヨク樂

シク思フライフ

朋友ハ

我ト年輩似ヨリタル親シキ中ナリ

信ニ之ヲ

我ヲ信ズルヤウニセントナリ、信ズトハ、尤ト思ヒ頼モシト思

フヲ云

小者懷ハ之ヲ

少キ者ハ我ヲ懷カシク思ヒ、慕トキフヤウニセントナリ○父兄ニ准

ジテ子ノゴロニセバ、老者安ズベシ、忠信ノ二ツヲ以テ交ラ

バ、朋友信ズベシ、子弟ニ准ジテ慈愛セバ、少者ナツクベシ○

志シトイヒ願ト云モ、実ハソノ所能トキヲ云ナリ

(1)「顔回者、……小孔子三十歳」「仲由……字子路、一字季路、

小孔子九歳」と『孔子家語』七十二弟子解にあり、『史記』仲尼

弟子列伝も、同じように伝えている。眼は、『論語』本文が「顔

淵季路」とある以上、顔淵の方が年長だったのではないかと疑う

のである。これはまた、『孔子家語』への信賴が篤く、ここでも

「以齒言之、季路当在顔淵之上、今不然者、意此時顔淵先入、而

季路後入、故以入侍之先後叙之也」とする春台『論語古訓外伝』

を採らないということである。

(2)「衣」を、朱子は「衣、服之也」として動詞とする(『論語集

註』。貞齋『論語集註俚諺鈔』は、これに忠実に「輕裘ヲ衣キテ」

と訓読している。しかし羅山点・闇齋点・後藤点などは「衣」を名詞として訓読し、徂徠は、これを動詞とする訓みは「不識古文辞」と論断した。春台をはじめ、胤もこれに従っている。

(3) 「伐、誇也」とする朱子『論語集註』に対して、仁齋は、「伐、猶党同伐異之伐、言不毀害人之善也」（『論語古義』）とした。

(4) 「君子不施其親」（微子篇第十章）

(5) 「無施勞」について、古注（孔安国）は「不以勞事置施於人」とし、仁齋・徂徠・春台・大峯らがこれに従った。朱子は、古注でも通じるとはしながら、「勞」は功績で、一句の意味は『易経』繫辞上傳の「勞而不伐」と同じだとした。

(6) 顔淵の答えについての朱子の理解は、自分の功績や善行について自慢したくないということであるが、胤は、善人を妨げず功績ある人を無視したりしないということである。

(7) 為政篇第十二章

(8) 「浩生不害問曰、樂正子何人也、孟子曰、善人也、信人也、何謂善、何謂信、曰、可欲之謂善、有諸己之謂信、充實之謂美、充實而有光輝之謂大、大而化之之謂聖、聖而不可知之之謂神、樂正子、二之中、四之下也」（『孟子』尽心下篇）

(9) 朱子は、一般的に老人が安心して暮らせるように願ったという解釈と、孔子自身に安心感を懐いてもらえるように努力したいという抱負を語ったという理解を併置した（『論語集註』）。徂徠は後説をよしとし、春台は前説を採ったが、胤は後説に与した。

二十七

子曰、已矣乎、

教テ倦ザルハ孔子ノ志ナリ、サレド志厚ク学ヲ好ム者世ニ罕ナル故ニ、思フヤウニ教ヘヲ施ス事モナラズ、徒ニカクテ已ナシカトナリ

吾未見能見

見付ル也

其過、而内

心中ニ也

自訟者也

自訟トハ、人ヲウラミセムルガ如ク、自ウラミセムル也

(1) 胤は「ヤンナンカ」と訓読するが、これについては強齋に議論がある。「已矣乎トヨメハ旨カ違フ、ソレテハ已ンテ仕マフタコトヲ嘆スル詞ニナル、ヤンナンカト疑ヒウケテ嘆スル、是ヨリサキ是テ已ムテアロフカト云語意ソ」（『論語講義』）。胤が強齋に拠っているとは言えないが、意図する所は同じであろう。ちなみに、羅山点・闇齋点・後藤点ともに「ヤンナルカナ」である。

(2) 徂徠『論語微』は「顔子不貳過」（雍也篇第二章）を引いて、顔淵の死後は、そういう門人がいなくなったという嘆きだとする。これを正面から否定するのが明霞であり、孔子が一般的な時勢の

衰退を嘆いたものだとした。「見其過而内自訟、与不貳過不同、此就世人而言之、故曰未見、若為顔子死後之語、豈曰未見乎」(『論語考』)。

二十八

子曰、十室之邑、

至極ノ小邑ヲ設タルコトバナリ⁽¹⁾

必有忠信如丘者焉、不如丘之好學也

忠信ノ質、ワレニ同シキ者ハ世ニ多カラメドモ、我ホドニ學ヲ

好ム者ハ、世ニ多クハアラジトナリ、十室トハ、自ノ口ヨリ卑

下ノ詞ナリ

(1) かりに十軒ほどのごく小さな邑を想像してみてもということ。

明霞の「十室之邑、設言之也」(『論語考』)に拠る。腋は、古代

の邑制を踏まえての南冥の議論「或曰、十字疑當作十、字之誤也、

是或然矣」(『論語語由』)を意識して、こう解釈している。

(2) 朱子は孔子の言葉を、「忠信」のような生来の美質に甘んじて

はいけないという戒めとして読む。「生知」であるはずの孔子が、

なぜ「好學」を自認するのかと設問して、朱子は、それは事実と

して孔子が「好學」であったことに加えて、後世の学者を励ます

ための発言でもあるとする。「夫子生知而未嘗不好學、故言此以

勉人」(『論語集註』)。これに対して徂徠の解釈は、極めてユニ

クなもので、邑宰(地方長官)となっても學問の興隆に務めず、

人々の向上心の欠如に責任転嫁する門人に向かつて、孔子が叱責

したのだとした。徂徠によれば、どんな田舎の村にも自分と同じ

ような忠信の人物はいるはずで、そういう人物ならば學問を好ま

ないはずはないだろうと孔子は言ったのである。こう解釈する徂

徠は、皇侃『論語義疏』が引く一説に倣って、「焉」を下句にか

けて「焉ンゾ」と反語の辞とするのである。「言雖極小之邑、必

有忠信如我者、則豈無好學者哉、特未使其學焉耳、苟使學之、必

能好之也」(『論語微』)。しかし徂徠の解釈は、春台・南冥らの徂

徠派を含めて、支持されなかった。春台は「此章孔子自言好學、

以勸人學也」(『論語古訓外伝』)として、朱子と同じように後生

への励ましの意図を持つとしたが、腋は、淡々たる孔子の述懐と

する。他者への勸学の意図を読むことを不要とする感覚は、履軒

『論語逢原』にも見える。

生来の美質に頼って「好學」に欠けるとどうなってしまうのか、

こういう議論が崎門でなされている。「異端デモ釈迦ノ達磨ノ老

莊ノト云モノハ、ユカミナリニモアノ様ニ棟梁ニナルカラハ、聖

門ニ於タラハ、曾点ノ下ニハ井ヌモノゾ、カナシイコトハ生付ノ

ヨイカ害ニナリテ、異端ノ大祖ニナルモ、道ヲ聞カヌヘソ、ソ

レ何ソナレハ好ムト云味マテイキタ、ヌユヘゾ」(綱齋『論語師

説』)。「董仲舒・韓退之ナト孔門ニ遊ハセタラハ、子貢ト上下ヲ

ナスヘケレドモ、学ハレヌユエ、氣質タケノコトソ」(強齋『論語講義』)。強齋は、陸象山や王陽明もまたこれらと同じだと論じている。